

博物館だより

NO. 1

SUITA CITY MUSEUM



第2展示室全景

吹田市立博物館は本年11月15日で開館1周年を迎えます。特別展と企画展を一度ずつ経験し、まもなく始まる特別展「海を渡ってきた^{さんびと}陶人たち」の準備に追われています。この10か月あまりの間に非常に多くのことを学び、博物館の運営とはどうあるべきかを実感し、身の引きしめる今日この頃です。

当館は、歴史資料の収集と保存、調査研究、公開展示の3つの機能をバランスよくこなうことを目的として、紫金山公園に建設されました。この地には、難波宮と平安宮の2つの造宮瓦窯(国指定史跡)や、市内最古の木造建築物である吉志部神社本殿(重要文化財)などがあり、わが国の歴史上にも貴重な文化財の集積地です。これらの文化財を守るとともに、当館を中心とした市民の憩いの場をつくりたいと心掛けております。

まだまだ多くの課題を抱えて歩み始めたばかりの博物館ではありますが、ご来館された方々に満足していただけるような楽しい博物館を目指して努力いたしますので、今後一層学習の場として活用されますようお願いしております。

建設の歩み

吹田市では大正期以来、大阪市のベッドタウンとして、また、戦後には千里ニュータウン建設や高速道路網の整備、日本万国博覧会の開催などによって、自然景観や歴史的な風土が大きく失われつつありました。一見、この華やかな近代都市への変貌も、それがあまりにも急激であるために、吹田の面影を振り返ろうとする意識が、やがて市民のあいだにも広がりつつありました。



工事前の博物館用地

このようななか、吹田市では昭和43年に市史編纂事業に着手し、昭和49年からは埋蔵文化財の本格的な発掘調査を開始して、先人の足跡を記録に残し、失われてゆく文化財を後世に伝えるための事業が開始されました。これによって、発掘調査で出土した埋蔵文化財のほか、古文書、民具など、集まった文化財は市内数箇所に分散され、整理・収納されてきました。これらは当初の形を止めているものは少なく、彩色が劣化していたり、虫や微生物の被害に会っていたり、錆や変形が進んでいたりと、それ自体が例えればもう重病人なのです。このような文化財については、早急に保存処理を講ずる必要がありました。また収集された文化財は系統的に整理・調査され、良好な保存環境のもとに収納されて、やがて歴史教育の素材として公開し、活用する必要が生じてきます。このようなことから、文化財を調査研究し、収納して、公開展示する文化財専用施設が必要となりました。

本市は昭和15年に市制が施行されて半世紀がたち、この間、戦争と戦後復興そして高度経済成長へと激動の時代でありました。そこで市制50周年のこの記念すべき時期に、市の歴史を振り返るためのふさわしい事業として、市立博物館の建設が起業されました。

昭和60年度から、展示資料についての基礎的なデータを集めるため、市内全域の文化財調査が開始されました。昭和61年度には、歴史各分野の専門家や、社会教育・学校教育関係者を集めて建設準備委員会が設置され、様々な論議のなかに基本構想が策定され、館のもつ設備機能や展示シナリオが着々と整ってきました。

昭和63年11月には基本設計が始まりました。本博物館の特徴は展示構想の中に積極的に遺跡保存を図るために、館への展示活用を図っていったことです。そのため、竹谷町で検出された12号須恵器窯跡や、五反島遺跡で検出された古代堤防を樹脂加工して移築し、常

設展示室に配置しました。このように、館の展示設計のなかに、保存の必要性の高い重要遺構を組み込み、遺構そのもののもつ実物の規模と迫力をみていただくように配慮しました。

博物館の柱である展示は、地域性を十分に表現した展示となっており、常設展示は時代の流れに沿って資料を展示した通史展示と、古代吹田の大きな特色であった古代窯業遺跡をテーマとしたテーマ展示に区分し、各々違った視点で学習していただけるようにしました。その他、企画展・特別展をおこなうための特別展示室を設けて、種々の展示テーマに対応できるように配慮されています。

博物館は平成元年12月に工事用進入道路が着工され、平成2年5月には建設工事に入りました。工事が進んだ平成3年12月には、大型の移築資料が館内に搬入され、内装・展示工事の仕上げに入り、平成4年3月に工事は竣工しました。以後、館内大気の安定のための作業と資料の陳列に入り、11月15日に博物館はオープンしました。

教育委員会が歴史民俗資料館の建設構想に着手して、この博物館の竣工まで約10年の年月が経過していました。この間に、当地を通過する都市計画道路の路線変更や紫金山公園



館へ搬入される移築須恵器窯跡



第1展示室

の計画決定などの諸手続きを経て、館の敷地が決定されましたが、館の内容についても何回かの論議をへて、最終的には博物館と文化財保護施設としての設備配置を行うものとして完成したことになります。この間において、資料提供者をはじめ、資料調査や計画策定にご協力頂いた多くのかたがたに、あつくお礼申し上げます。

平成5年度 特別展

海を渡ってきた^{すえ びと}陶人たち

平成5年10月17日(日) ～ 11月28日(日)

5世紀初めに、高度な土器生産の技術をもった人々が朝鮮半島から日本列島に渡って来ました。当時、日本列島で使われていた土器は、「土師器」といわれる弥生土器から発展した、軟らかい素焼のものでした。そこに、轆轤を駆使して大量生産し、大規模な窯で硬く焼きしめるといふ新しい技術で作る土器が広まっていったのです。「須恵器」といわれる土器の始まりです。『日本書紀』には、この技術を伝えた人々のことを「陶人」あるいは「陶部」として記されています。タイトルにある「陶人」という言葉はここに由来します。

日本各地には、最初に陶人たちが渡ってきた頃の須恵器の窯跡が多数残されています。これらの窯が築かれた時期、焼かれた土器の特徴など、発掘調査の成果によって明らかになった事実から、彼ら陶人たちが対馬海峡を渡り、北部九州から瀬戸内海の沿岸伝いを東へと進み、大阪平野周辺の丘陵にも到来したことを如実に物語っています。そして、大阪平野周辺は当時有数の須恵器生産地となり、泉北丘陵には大阪南部古窯址群(陶邑)と呼ばれる一大窯業地帯が形成されました。

同じ頃、大阪平野北部でも、現在の吹田市朝日が丘町に1つの須恵器窯が築かれました。吹田32号須恵器窯跡です。この窯では朝鮮半島様式の特異な文様のある須恵器が焼かれ、大阪平野、さらにはわが国における須恵器生産の始まりを知る上でも重要な窯跡となっています。その後、千里丘陵では6世紀を中心に100基を超える窯が築かれ、吹田市域では58基以上が確認されています。市内に残されている2つの造宮瓦窯群(国指定史跡)が8世紀から9世紀初めに営まれ、難波宮と平安宮の瓦を焼いたのも、こうした須恵器生産の技術が生かされたものでした。

今回の特別展は、このように、吹田の古代史像を特色づける須恵器生産に携わ



宿禰塚古墳出土須恵器 (岸本道昭氏蔵)

った人々の姿を、その原点となる吹田32号須恵器窯跡を足掛かりに復元しようとするものです。出陳される資料は、西日本の8府県にわたり、最古期の須恵器窯跡やその消費地である古墳・集落跡の出土資料など、35遺跡から約400点を数えます。なかでも、福岡県八並窯跡、小隅窯跡、居屋敷窯跡、愛媛県市場南組窯跡、兵庫県出合窯跡、宿禰塚古墳の出土資料など、あまり



堂山古墳群出土須恵器（大阪府教育委員会蔵）

一般に公開されたことのない資料が多く含まれています。このほか、5世紀を中心とする港湾遺跡で、海との関わりが注目される岡山県管生小学校裏山遺跡を始め、大阪府大庭寺遺跡、一須賀2・3号窯跡、和歌山県鳴滝遺跡、楠見遺跡などの出土資料は5世紀の朝鮮半島との交流がうかがえるものです。また、パネル展示では、わが国への須恵器生産技術の伝播に密接な関係にある伽耶地方の陶質土器窯として注目される、大韓民国慶尚南道昌寧郡余草里陶窯跡の発掘調査の成果が日本で初めて公開されます。

以上のように、今回の特別展では、いくつかの最新の重要な調査成果を加えて、北部九州から瀬戸内海沿岸一帯に広く展開したわが国最古期の須恵器窯跡の出土資料が展示されます。海を渡ってきた陶人たちの築いた窯とその製品の展覧を通じて、吹田の古代史にも大きな役割を果たした須恵器生産のルーツを探るとともに、古代の文化交流の中で、わが国最初の須恵器生産者の黎明期の姿が鮮やかに甦ることと思います。

講演会ご案内

●10月24日（日）14:00～16:00

テーマ 「韓国の土器文化からみた日本」

講 師 京都文化博物館 定 森 秀 夫 氏

●11月21日（日）14:00～16:00

テーマ 「海を渡ってきた^{すえびと}陶人たち」

講 師 大谷女子大学 中 村 浩 氏

会場は吹田市立博物館講座室。各講演会とも受講無料で先着順(120名)です。

宮脇発太郎赦免状

(宮脇幸穂氏寄託)



「四海こんきういたし候ハ、天禄ながくたたん、小人に国家をおさめしめば、災害并至と…」有名な大塩平八郎の檄文の冒頭です。まさに大塩が「救民」を旗じるしに挙兵しようとした天保八年(1837)は、飢饉が打ち続き、幕藩体制の矛盾に民衆の不満が高まり、各地で一揆や打ちこわしが頻発した時代でした。大坂でもその数年前から米価・諸物価が高騰し、飢饉と相俟って餓死者も出る有様でした。

このような状況のもと、元大坂町与力で陽明学者としても有名であった大塩平八郎は、大坂町奉行の不仁や役人たちと結託し私利を追求する豪商たちに対して憤りを感じ、門下生や農民たちとともに「世直し」をスローガンとして、政治を正すために挙兵しました。

しかしながら、大塩の計画は事前に発覚し、十分な準備も整わないまま近在の農民たち百余名で、天満周辺に火を放ち豪商を襲撃しますが、町奉行側の兵にあえなく敗れました。

吹田の泉殿神社の神主であった宮脇志摩は、大塩の叔父であり、仲間の連判に加わり、乱にも参加しようとしたのですが、当日の蜂起が早まったため、参加がかなわず切腹しました。宮脇志摩は初め大塩権八郎といい、先代宮脇日向の養子となった人物でした。

「宮脇発太郎赦免状」は、宮脇志摩の長男発太郎の天草流島が赦された時に長崎県から出

「宮脇発太郎赦免状」
(釈文)
天草嶋流人
摂州島下郡吹田村
西宮神主
宮脇志摩悻
発太郎
年四十六歳
右之もの御赦免ニ付
出嶋申付候
明治三年 長崎縣 印
二月

された赦免状で、明治三年二月と記されています。当時の刑罰はその家族にも及ぶもので、二男新次郎は壱岐に、三男辰三郎は隠岐にそれぞれ流されていましたが、同じく明治になって赦免されました。

「大塩の乱」は幕府の政治に一石を投じ、その後の社会や民衆に大きな影響を与えたことは言うまでもないでしょう。

企画展報告

疫神信仰にみる祈りと願い

平成5年8月1日から開催された「疫神信仰にみる祈りと願い展」が8月29日に終了しました。

本展は、江戸時代、死亡率がたいへん高く恐れられていたはしか、はしか、コレラといった流行病をもたらすと考えられていた疫病神に対する信仰の諸相をとりあげたもので、当時の人々の各疫病に対する考え方、認識といった病観に迫ろうというものでした。

展示作品は、疫病から逃れるため病除けに用いたはしか、はしか絵といった錦絵、護符、絵馬、郷土人形、玩具、はしかの民俗資料を中心に、異本病草紙の一つ「奇疾絵巻」(重要美術品)によって具体的な病状の描写をみていただいたり、大江山の酒吞童子も、その



企画展展示風景



講演会風景

原像は都に疫病をもたらすはしか神であったという最新の研究成果も取り入れ、「大江山絵巻」などを展示しました。

また、8月8日には、滋賀大学教授高橋昌明氏を迎えて、講演会「酒吞童子の原像—都に疫病をもたらしたはしか神—」を開催しました。

特別展資料紹介

船形須恵器 (5世紀前半)

堺市大庭寺遺跡から出土。須恵器の船としては現在唯一の出土例で、復元された長さは27cm、現存部分は船首の1/3程度です。大阪市長原高廻り2号墳や京都府ニゴレ古墳出土の船形埴輪、八尾市久宝寺遺跡出土船の実例と比較しても、軸先の波よけ板の構造などがよく似ています。丸木船に舷側板を組み上げた準構造船と思われ、船内補強のための仕切り板やピボット(櫂の支柱)も表現された精巧なものです。陶人たちが自らの航海に使った木造船を故国への思いを募らせて作ったとも考えられないでしょうか。



船形須恵器 (財大阪府埋蔵文化財協会保管)

編集後記

開館以後1年近くでようやく博物館だよりの第1号をお届けすることができて嬉しく思います。特別展や企画展のご案内はもちろん歴史講座の予定や常設展示資料の紹介なども掲載し、吹田市立博物館に関する情報を少しでも多くの皆さんに知っていただきたいと思っています。今後は年2回のペースで発行し、内容の充実もはかっていきますのでよろしくお願い致します。

吹田市立博物館だより 第1号

平成5年10月1日発行

吹田市立博物館

〒564 吹田市岸部北4丁目10番1号

TEL.(06)338-5500 FAX.(06)338-9886

交通案内

JR岸辺駅下車徒歩20分

阪急吹田駅から桃山台駅前ゆき、山田櫻切山ゆきバス「五月が丘」

下車徒歩8分

千里中央ゆき、阪急山田ゆき、摂津ふれあいの里

ゆきバス「岸部」下車徒歩10分

阪急南千里駅からJR吹田ゆきバス「五月が丘」下車徒歩8分

